

原爆から逃げたい

資料館の本館、広島市全体の被爆状況を示す模型の前で、全員で同館の元館長、畑口實さんの話を聞く。「ヒロシマピースボランティア」と書かれた緑のジャンパーを着た畑口さんは、来館者への解説をするボランティアの一人でもある。

「私の親は当時、ここから20^{キロ}西の宮島口に住んでいました。父は広島鉄道局に勤めて、広島駅に通勤していました。」静かな声でとつとつと語る。

—その時、母はピカッと光るのを感じ、音がして広島の方が煙でもうもうとなっているのを見たそうです。鉄道が開通して4日後、母は父を探しに広島駅に行き、勤務場所と思われるところを探しました。運よく父の同僚の方も探しおられ、一緒に探しました。しばらくして父のバックルと懐中時計を見つけ出し、母は、そばにあった遺骨と一緒に自宅に帰りました。父は31歳、母は27歳で、私は母の胎内にいて2か月でした。父を知らないし、父も私の存在を知らなかったと母は言っていました。

私が2歳のころから母は仕事に出ましたが、5歳くらいからは、朝と昼のご飯を置いて仕事に行きました。私は食事をとると母の仕事場へ行ったりしていました。当時、母は原爆の話をしなかったし、私も聞こうとはしませんでした。私はアメリカの音楽が好きだったので、アメリカに憧れていましたが、原爆で生まれながら父がいないことを考え始める10代半ばから、アメリカへの憎しみを覚えるようになり葛藤がありました。

21歳の時に被爆者手帳を受け取ったのですが、見るのも嫌でした。広島市職員になりましたが、「原爆」という言葉を聞くのも嫌でした。51歳でこの館長になったのですが、それまで2回しか、この資料館には入ったことがありません。友人、同僚にも、自分が胎内被爆者だとは言っていませんでした。この遺品も、父の50回忌の時、一度は墓に納めました。—かたわらの展示ケースの中のバックルと時計に視線を送った—

—戦後生まれの初の館長として、いろいろ聞かれることが多かったのですが、自分自身が被爆者だというのは、当時の事を思い出さざるを得ないので辛かったかったです。

被爆60年は、私が退職する年です。ヨーロッパも大戦後60年で、多くの記者が来られ質問されました。「なぜ被爆した事を隠していたのか、被爆したことを悪いことだと思っているのではないか」と。私の心を当てられたようでした。30代、40代は自分が被爆していたことを隠し続けていたのです。「なぜ、そんな風に悪いと思うようになったのか？」と言われても、「分からない。原爆とか、

平和とから逃げたい、という気持ちでした。被爆者差別とかもあったと聞いていましたが、でも9割の被爆者は隠そうとしてきたと思う」。

退職の日の記者会見。記者から「お父さんは原爆で無残にも亡くなられた。お母さんは必死でご主人を探し、変わり果てたバックルと懐中時計を見つけ出した。あなたは館長として、世界の人々にこの事実を伝える運命のもとに生まれたのではないのでしょうか」と言われた時、少し気持ちが楽になりました。

自身が創設にかかわったヒロシマピースボランティアの話では、明るい顔になった。初めて募集した時、60人の定員に対し180人もの応募があったという。その時は講師の立場だったが、退職後3年経ってボランティアになった時は研修を受ける側になった。ボランティアになった動機を「被爆の実相を伝えたいと思い、自分の体験も伝えられるし……。」

館内のあちこちで、入館者に静かに説明している緑のジャンパー姿が見られた。